

威奈大村骨蔵器・山田寺塙仏の模造製作

飛鳥資料館

飛鳥資料館では、常設展示の充実を目指して各種の模造製作を進めている。本年は「日本古代の墓誌」展を機に、威奈大村・下道罔勝罔依母夫人骨蔵器の模造と、昭和51年の山田寺塔跡の調査で出土した十二尊連坐塙仏の復原模造、その他軒瓦類を製作した。このうち、新しい方法を試みた威奈大村骨蔵器、および十二尊連坐塙仏についてその概要を報告する。

威奈大村骨蔵器の模型 この骨蔵器は、半球形の蓋と身に高台を鋲留めする鑄銅製容器で、身・蓋共ごく薄手（1～3mm）に輻輳仕上げを施し、蓋外面に浅く銘文を鑄刻して外面全体に鍍金を施している。模造製作にあたって、従来の鑄造法では銘文が不鮮明となる恐れが十分考えられたため、新しい試みとして、樹脂製雌型を用いる電気鑄造法を採用した。工程の概略は、1)従来の方法でシリコン製雌型を作り、これに成形用樹脂を塗り込み、ガラス繊維で補強して、一旦樹脂製複製品を製作する。2)この複製に離型剤を塗り、成形用樹脂を2～3mm厚に上塗りし、樹脂製の雌型を作る。3)樹脂製雌型をメッキ槽で0.5mm厚に銅メッキし、裏にエポキシ樹脂を裏打ちする。4)銅メッキ層とエポキシ樹脂層からなる模造本体を樹脂製雌型から外し、この上に金メッキを施し、これに2の段階で製作した樹脂製雌型から起したエポキシ樹脂製の内面を貼る。5)これに古色を施して仕上げる。この結果、銘文は当初の見込み通り鮮明に写し出すことができ、この方法が在銘金属製品の模造製作に十分効力を発揮するものであることが確認された。

山田寺十二尊連坐塙仏の復原模造 山田寺塔跡の調査で出土した約140点の塙仏のうち、同形の独尊像を4列3段に配し、十二尊連坐塙仏としたものは約110点の断片が出土している。しかし、その大半は塔焼亡時の焼損が著しく、像容を完全に留める例は皆無であるため、これを復原した模造を製作することとした。まず1軀分の像容を最も多く残す断片から型取りを行い、石膏製複製品を作る。次いで天蓋、光背、仏像、蓮華座各部分について原形を良く残している断片を参考に、油粘土で石膏製複製品の欠損部を補い、1軀分の完全な複製を作る。これを再度型取りして12軀分の石膏製複製品を作り、これを4列3段に並べ、もう一度型取りを繰り返す。シリコン製の十二尊連坐塙仏の雌型範を作製し、これから樹脂製の模造2個を製作した。この作業を通じて、この塙仏は、上部に宝珠から3葉の半パルメット文様と蕨手風の文様を左右対称にあしらった天蓋および長短各2本の璎珞を置き、反花に複弁を表わす蓮華座上に結跏趺坐し、二重円相光背を負う定印如来形坐像を表わしていることが知られた。なお、十二尊分の復原寸法は縦18.5cm、横14.5cm、厚1.6cmとなり、『護国寺本諸寺縁起集』の記載にある寸法とほぼ一致することが確かめられた。なお、模造2個のうち1個は古色仕上げとしたが、焼損した断片の表面には粒状の金箔が付着しており、1個は、創建時塔内荘嚴の有様を偲ぶ資料として漆箔仕上げとした。

（大脇 潔）